



「下村満子の生き方塾」ニュース

Vol.01 2016.06

—第Ⅵ期修了式及び第Ⅶ期入塾式特集号—



●鳩山会館で修了・入塾式

「下村満子の生き方塾」は4月23日、東京音羽の鳩山会館で第Ⅵ期修了式と第Ⅶ期入塾式を開きました。東日本大震災1カ月後の2011年4月16日に入塾し、今期は丸5年というひとつ目の節目を通過し、6年目という新たなステージを迎えました。修了・入塾式はかつてない盛り上がりとなりました。

皆勤賞の授与、塾生の決意発表などのなどのセレモニーを終えた後、下村塾長は第Ⅶ期の入塾にあたり、次のような記念の講話をしました(抜粋)。

皆さん、こんにちは。今日は鳩山会館という修了・入塾式にふさわしい会場を使わせていただいています。鳩山元首相、素晴らしい会場を貸していただきありがとうございます。

先程第Ⅵ期の修了式と第Ⅶ期の入塾式を行いました。ちょうど5年前、東日本大震災の直後にこの生き方塾はスタートしました。今、熊本、大分は震災で苦しんでいますが、5年前は大震災に加えて津波、原発事故も起き、原発事故に伴う風評被害も出るなど、四重苦に喘いでいました。福島は依然として原発事故は終息の目途は立た

●ソフトの入替ができなかった

この塾は自分を含めた「日本の劣化」に何とかくさびを打ち込みたいという思いで、独断と偏見で始めました。テーマは「生きるとは何か」、「命とは何か」、「幸せとは何か」、といったような人生の原点に向き合うものです。学校はおろか、家庭でも教えることが少なくなったこのようなダサいテーマに、なぜ取り組まなければ、と考えたのか少し説明します。福島県の男女共生センター館長を10年程務めた後、少しは世の中は良くなったのか、と振り返ってみましたが、世の中は悪くなる一方です。政治家が悪い、官僚が悪い、社会が悪い、学校が悪い、先生が悪い、親が悪い、メディアが悪い、医者が悪い、経営者が悪い、警察が悪いと、すべて他人のせいにする社会が出現してしま



東京音羽・鳩山会館

るけれども、自己反省が全くない人ばかりがはびこる社会になってしまいました。

先の戦争で日本は敗れ、全てを失う無一物になりました。私も満州から裸同然で



ニュース発行にあたって

今期は毎月1回、「下村満子の生き方塾ニュース」を発行します。内容は毎月の勉強会での下村塾長の講話、応援団講話、出席者の感想などです。

「生き方塾」は6年目という新たなステージを迎えたことから、第1号では修了・入塾式での塾長講話を中心に特集号としました。

ず、風化と風評という二つの風にさらされています。

顧みれば5年前の大震災が起きた時には、開塾は無理だろうと覚悟していたのですが、入塾を決めていた方々から、「今こそ、こんな苦難の時こそ、『生き方塾』が必要なのです。『生きるとは何か』、『命とは何か』を学びたい」という強く熱い声、そういう熱い声や思いが原動力になり、震災から一カ月後の4月16日に福島市で開塾式を開くことができました。あれからあつという間に5年経ちました。中高年齢者にとっては5歳分、死に近づいたということです。

引き揚げ、敗戦直後の大混乱の中で、命を落とす危機に直面し、今ここに立っているのが奇跡であることのような体験すらしました。どうしたら食べられるか、どこで雨露をしのげばいいの、といった敗戦の廃墟から私たち日本人は立ち上がり、死にものぐるいの努力の末に世界有数の経済大国にまでなりました。そして私たちは日本の歴史上かつてなかったような物質的豊かさを手にしました。

しかし、今日の日本はどうでしょうか。親殺しや子殺し、高齢者に対する虐待、家庭内暴力、教育現場でのいじめ、教師による女子生徒への性的暴力とか、生徒の教師への暴力、なりすまし詐欺のような弱者をだます犯罪などが毎日のように、報道されています。それは、成熟した社会になったにもかかわらず、高度成長時代の拝金主義、物質中心主義、成長至上主義といった価値観から脱却できていないからです。ソフトを入れ替えられなかったから、日本人が本来持っていた豊かな心へのソフトチェンジができなかったのです。日本人は本来その遺伝子の中に素晴らしい利他の心と豊かな感性を持っており、また自然を愛し、自然と一体になることがもともと得意な民族だと私は思っております。また、謙虚で質素で、人の道を大切にしてきた歴史も持っています。

●まずは自分の足で立つ

私は最初、二本松の父の実家で車座になり寺子屋形式で塾を始めようかと考えました。この塾に入ったからといって資格が取れるわけでもないし、それを利用して商売をすることも出来ず、肩書になるわけでもないし、まして金が儲かるわけでもありません。「生きるとは何か」、「命とは何か」を学ぶダサイ塾ですから、入塾希望者が大勢いるとは考えませんでした。しかし、塾発足を発信すると、200人近くの人が入塾を希望しました。さすがにそれでは多すぎますが、入塾条件は「人間であること」と、「15歳以上」ということだけ。どうしようかと悩みましたが、大震災や原発事故などがあって経済的に厳しい方、県外に避難した方もあり、1期生は130人でスタートしました。

あれから丸5年経ちました。福島では何もなかったかの



お庭からのぞむ鳩山会館

ように風化しつつあります。原発事故は未だ、原因すら説明されておらず、汚染水は溜めるだけで有効な処理方法が見つかっていません。そうした中で、福島の人はいつまでも被害者だ、被害者だと言って泣いているだけでは何にもなりません。生きるということは、自分の足で立つということです。そして何か一つでも、世のため、人のためにできることをする。それが人間としての尊厳につながるわけですから、まずは自分は何をしたいのかと自分と向き合って、やれることをやってほしいのです。

●「心のレベル」が一番大事

京セラ名誉会長の稲盛和夫氏が塾長を務めている「盛和塾」という経営塾があり、尊敬する稲盛氏と私の考え方のベースはほとんど同じですが、稲盛氏が常に言うのは、「何かに迷ったら、それが人間として正しいことなのかを基軸に考えること。人間として正しい。それが生きることの原点だ」という極めてシンプルなことです。私も全く同じ考え方です。

今は能力というか、頭が優れていることが一番価値あることと、と刷り込まれ、東大卒でなければ政財界のトップにはなれないみたいな風潮があります。しかし現実、頭のいい東大卒の人が素晴らしいのなら、今の日本はもっと暮らしやすい国になっているはずですが、日本は目に余るほど劣化しています。

何か、大事なものが欠けているのです。それは「心のレベル」です。頭が良くてもそれを悪い目的に使えば詐欺もで



ご挨拶と問題提起。鳩山友紀夫元内閣総理大臣

きるし、非合法すれすれの金儲けもできます。パナマ文書の暴露によってタックスヘイブンの実態が明るみに出ていますが、世界のリーダーの中には租税逃れをして

いる人もいることが分かってきました。日本の企業も租税逃れをしていますね。頭を悪い目的に使う典型でしょう。今の世の中は、生きる価値をどこに置くのかという一番大事な部分を論じていません。

一流大学を出て、一流企業に入れば安泰だと信じられていても、その一流企業が無様なことをしているのが現実です。超一流の東芝が粉飾決算、三菱自動車が燃費改ざんなど、一流大学卒の経営トップたちは自分の利益確保のために、いい頭を悪事に使っている。価値判断の基準を、得か損か、楽して金儲けできるかなどに求めた結果が、不正、不祥事になったのです。こうした心の劣化が日本の地位転落に拍車をかけ、Japan as No.1と言われたのは遠い過去の話となりました。政治家たちが中国や北朝鮮と違って、日本は民主主義の国だ、言論の自由がある国だと威張ってみても、日本のメディアの自由度は国境なき記者団に、タンザニアに続いて世界72位と指摘されました。

政府自民党の圧力で、NHKは国営放送に成り下がり、民放は自民党の恫喝に屈服し、政府与党批判はしないし、新聞も自主規制し政府自民党にとって当たり障りのない記事を垂れ流しているのが現状です。国連も日本の報道の自由は危機にさらされていると警告を受けました。

●「正直」の波動が世界を支える

今、世界は一見平穏ですが、実は人類にとってのるかそるかの正念場に来ていると思います。多くの人は今の平穏は明日も明後日も続くだろうと思っているけれども、私は危機感を感じています。それはリーダーと称されている人たちは、生き方のモデルにならなければいけないのに、一番墮落しているように思えてならないのです。私はだいぶ前にグライマ法王と話した際、「どうして世界はこんなに悪くなっていくのですか」と聞きました。すると法王は「第二次大戦が終

わってからずいぶん経つが、小規模な地域戦闘は起きていても、第三次大戦は起きていませんね。それは世界の指導者が偉いのではなく、毎日を生懸命生きている正直な名もなき人たちが、世界平和を祈っているお蔭なのです」とお答えになりました。私もその通りだと思います。

自国に税を払わず、低課税の国に富を移して巨万の資産を築く世界のリーダーたちが、蓄財に頑張る熱意を、世界平和に注げば、各地の紛争は直ちに解決できます。こ

うした指導層の腐った姿を見て、真面目に生きている名もなき人たちが、「ああ、バカらしい」と諦めてしまったのが最悪ですが、きっと、そういうことにはならないと思います。一人ひとりの小さな祈り、人間としての正しい価値観

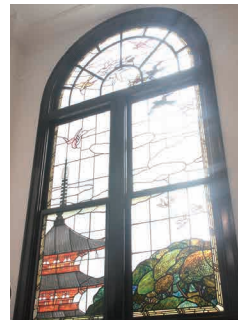
●価値観大転換の今

魚は頭から腐ると言われるように、世の中も頭、指導層から腐ります。一流と信じられていたものが次々と崩壊しているのが今です。中原先生もよくおっしゃるのですが、20世紀から21世紀にかけて全く新しい価値観が生まれてきています。私はジャーナリストとして世界各国を飛び回り、階層を超えて多くの人々を取材してきました。その中で20世紀の終わりごろから、世界は文明の大転換、ターニングポイントに直面していると感じ、そういうイメージを発信してきました。文明の大転換は非連続性のもので、人々が今立っている土台石がぐらついているということです。もちろん変化は毎日起こっています。一分前の私と、今の私は一分だけ年をとったわけですが、変化が怖くないのは連続性があるからです。しかし、文明の大転換には時間の連続性がありません。

大転換の時には、これまでの土台石、言い換えれば価値観、ものの考え方が崩れるから、これまでの常識が非常識になり、非常識が常識になります。崩れるそばからは新しいものが生まれ始めるけれども、新しいものは海のものとも山のもの分らないから怖いのです。だから、人々は壊れかけている既存のものを守ろうとします。特に安倍さんのように既得権益がある人ほど、それを守るために保守的になっていく。権力や富、既得権益を手放すことはとても怖いことです。今の全世界が保守になり、内向きになっているのは、既得権益の守りが原因だと私は思っています。新しい価値観への揺さぶり返し、既得権益を守るためのあがきが世界各地での紛争を引き起こしている、と私は見ているのです。

一方、新しい価値観の到来に気づいている人たちもいます。20世紀は「戦争の世紀」とも呼ばれ、「科学技術とモノとカネ」が文明の主役でした。カネやモノは、手に取って見ることができます。科学技術も成果を、製品という形で

がまとまって大きな波動となる。この波動が世界平和を維持している。つまり普通の人、一人ひとりの価値観、行動が世界を支えているのです。



鳩山会館のステンドグラス

見ることができます。私は決して科学技術を否定しませんが、科学技術と物質的豊かささえあれば全てを可能にできる考え方は20世紀の遺物なのです。

21世紀は、20世紀の価値観、考え方とは全く逆だと私は考えています。目に見えないものの価値、お金で買えないものの価値。稲盛氏が説くように、目に見えない心のレベルの高さこそが本当の価値だと思うのです。稲盛氏は、会社は社長の心のレベル以上には大きくならないと言います。どうということかということ、会社を経営している人なら誰でも、もっと会社を大きくして儲けを増やし、大金持ちになりたいと思うはず。会社を発展させる動機としては、それは全く悪いことではありません。

本当に会社を大きくしたいと思うのなら、トップである社長の心のレベルを高めなければ、会社は決して大きくなりません。なぜなら、企業というのはそのトップの心のレベルというか、心の器以上には大きくならないからです。心のレベルを高めると言っても、心は見えません。科学的に考えれば、見えないものは証明できないから、心はないものとして扱われています。

瞬間風速的に成功した人、成功している人もいますが、でも、違法行為をして逮捕されたり、社員を顧みないから内部告発を受けて不祥事が発覚するケースが少なくありません。だから稲盛さんは、経営者たちに対し、心のレベルを向上させてほしい、と力を入れて言います。私心を捨てて社員の物心両面の幸福を実現させれば、結果は必ず還ってくるのです。日本には「情けは人のためならず」という名言があります。利他をすれば、必ず報われるという教えです。心はどっかりと存在しているのです。

●この世は因果必然

ところで、私の基軸は禅です。仏教では、全ては原因、結果、原因、結果という因果必然の法則で動いていると考えます。稲盛さんも「生き方」という著作の中で、いいことをすればいい結果が出てくると、お書きになっています。当然悪いことをすれば、悪い結果が出てきます。ただしこの法則は、今日いいことをしたから明日にはいい結果が出るという即時的なものではありません。長いスパンが必要で、前世で悪いことをしていれば、現世ではなく、生まれ変わって来世で出てくるかもしれない。私が昨年末、失明しそうになったのは前世で悪いことをした結果か

もしれませんし、結果的に失明を免れたのも、それなりにいい原因があったからでしょう。

あの失明騒動のことを思い出します。12月初め、東京通信病院眼科を訪ねると、緑内障がかなり進行しており、もう手遅れだ、と宣告されてしまいました。仮に手術しても八、九割は失明すると覚悟してください、と告げられました。もし失明したら、ジャーナリスト下村満子、生き方塾長下村満子は存在しなくなる。他人のお世話になり、他人に迷惑をかけて生きることになる。そう思うと、私が生きている意味はない、死のうかとも考えました。

ただ、入院するまで若干の猶予があったので、坐禅に没頭しました。坐禅をしている最中、「まだ来ない明日のことを考えるより、今、この一瞬をベストを尽くして大切に生きよ」と、「生き方塾」でいつも自分が言っていることに気づきました。九割方失明すると言われても、まだ失明したわけではない。それに、そんな仮定ことを考えても意味がない。今を完全燃焼しなければならないが、私が手術するわけではない。私ができることは何か。そう考えていると、とにかく免疫力と体力、くよくよしないポジティブな精神

力をつけることだと気づきました。不思議なことに良くない方へ考えが傾くと、良くない方へ物事は進みます。それは自分で暗示をかけているからです。入院前の数日間は、毎日一人接心のように坐禅三昧の時を過ごしました。すると心が落ち着くというか安定し、焦りや不安は吹っ飛び、生きるも死ぬも、私の身は大宇宙にお任せだ、というようなゆったりしたおおらかな気持ちになっていきました。そして手術の結果は、成功率わずか1、2割との宣告でしたが、失明は奇跡的に免れました。

●包容力豊かな「無思想の思想」

仏教と聞くと、悲観的な宗教と思う方が多いのですが、仏教の本質を語る言葉に「衆生本来仏なり」というものがあります。仏教の世界では、人間を「完全無欠の絶対的存在」、つまり「仏」としてのポテンシャルを持っているのだが、毎日生きていけば、現実の壁に突き当たり、人間は仏という本来の姿から離れた存在になってしまうことが多い。しかし、修行を積めば本来の姿である仏になれるという教えです。悪いことをしたまま現世を去った人でも、来世でいいことをすれば、輪廻転生して仏になれるという楽観的な考え方です。つまり仏教では絶対神がないわけです。人間の不安、苦悩というのは、実生活の場で現れる不完全かつ有限の自分を否定し、完全無限という本来の自分になりたいという苦しみであり、それが修行ということです。私の失明宣告も修行一つの場だと思えます。苦しみは神様が与えてくれた修行のための贈り物だと思うことです。

仏教的というか、東洋の伝統的な考え方に「物心一如」というものがあります。肉体という物体と心は一つであり、分けることはできない、という考え方です。それだけでなく、「山川草木悉皆成仏」という言葉がありますが、山にも、川にも、草にも、木にも、みな仏が宿るといって、命が宿るといってのことです。

難しく言えば、東洋の考え方の基本は一元論「一つもの」の世界です。西洋の伝統的な考え方は、男と女、資本家と労働者、自分と他人、物と心というように物事を対比する二元論であり、ここから対立観念が生じてきます。物と心は相反するものと普通は考えますが、東洋的な考え方では、物と心は表裏一体の存在と見なします。アメリカのウーマンリブ運動は、男は女の権利、存在を侵害している。だから運動によって権利を奪い返すのだ、という主張です。これは一面事実ですが、運動を突き進めていくと、男は女の敵になってしまいます。そうなると、男と女は結ばれることができなくなってしまいます。70年代のウーマンリブを取材した私は、と

てもついていけないな、と感

じました。ところが東洋的には、男と女はコインの裏表ですから、双方が補い合って一つになる、つまり一つものという考え方です。

西洋的な考え方は、外界に向かって対象を追究する精神で、心理学も心というものを取り出して、客観化し、それを観察する手法です。一方、東洋的な手法は、光を心の内側に向けて内界を追究するものです。西洋的は手法を客観的とするなら、東洋的なそれは主観的です。だから、自然科学は西洋が得意とする分野なのです。自然が人間生活に災いをもたらすなら、それを制御しよう。そのためには原因を探り当て、対抗策を取ろうというのが西洋的な考え方です。こうした考え方が科学技術を発展させてきたのです。

ところが東洋人というか日本人は大自然には逆らえない、自然を支配するより、自然とどうやって共生するかを考えます。最近は大変な防潮堤を造れば津波被害を防げると勘違いしています。原発は絶対安全ですと言ったって、駄目だったのですからね。想定外というけれども、自然の力を想定すること自体、不遜なのです。それを分かっていないから、大災害になるのです。

自分は大自然の一部であるという一体感があるから、大自然と共生する。それが日本の伝統的な考え方です。日本人は、生まれた時はお宮参りするから神道、クリスマスはキリスト教、結婚式は神社や教会でやると神道であったりキリスト教であったり。お盆や彼岸は仏教、亡くなればお寺や神社、教会の世話になる。欧米人は、「我々は、日本人のこうした宗教観が分からない」と言うのですが、私はこれこそが日本人の宗教観だと思うのです。司馬遼太郎さんも前回の「生き方塾」でお見せしたDVDの中で、日本人の思想は「無思想の思想」と同じようなことを言っていましたね。一神教の人には「いい加減」に見えるでしょうが、一神教の場合は自分たちの神こそが正しいと考えるので異教は全て敵であり、だから正さなければならないと宗教戦争に走ってしまいがちです。

その点、日本の「衆生本来仏なり」も、神道の八百万の神も、多様な価値観を認め、人はみな平等という考え方です。衆生本来仏なりですから、仏は衆生の数だけいるわけです。同じ人間だから、色が白いか黒いかは関係ない。文化は後から出来たものですから。日本という国はアメリカ



力の真似をするのではなく、元々持っていた価値観、考え方を大事にして歩むべきなのです。

稲盛会長は著書「生き方」の中で、人生の方程式についてこう説明していますね。それは、「ものの考え方×熱意×能力」であり、成功の方程式でもあると。一番大切なものは「ものの考え方」だと。ものの考え方とは価値観ですね。性悪説を信奉し、人を見たら泥棒と思い、疑心暗鬼になっている人も多くいますよ。次に大切なものは熱意あって、どれほど真剣に立ち向かおうとしているかというやる気

●大宇宙の意思に沿って生きる

「山川草木悉皆成仏」という言葉は、人間も大宇宙、大摂理の一部であるという考え方でもあります。人間が一番偉いと考えるのは傲慢な発想であり、科学技術が解明したことは、とてつもなく大きい大宇宙、大自然を針の穴からのぞいた程度に過ぎないのです。にもかかわらず、それを絶対だと思い込み、科学的に証明されないものや、目に見えないものは信じない、あるはずがないという人も少なくありません。しかし、最近はこの科学技術が、目に見えないものの存在を証明するようになってきました。

私が手にしているのは遺伝子学者の村上和夫先生がお書きになった子ども向けの絵本ですが、この中で村上先生は「命は38億年前に、一つの遺伝子から始まりました。それが38億年の間に分裂を繰り返して、現在3千万種類の生物になりました。魚も、花も、蝶も、象も、鳥も、人間も、先祖をたどっていくと源は38億年前の一つの命にたどり着きます」と言っています。そして全て同じ遺伝子暗号を使って生きているというのです。それを科学が証明しているのです。だから地球上の生き物は皆、兄弟姉妹であるから、仲良く地球の上で助け合って生きていくのが、本来の姿なのです。我々が日常生活で先祖と言うと、曾おじいさんぐらいまでですが、38億年をたどった本当の先祖は一つの遺伝子に行きつきます。ということは、みんなの先祖は同じであり、みんな命は繋がっているということです。

一方物理学も仏教で言う「本来無一物」「無一物中無尽蔵」の世界を証明しています。無一物とは禅問答で出てくる無とか空(くう)の世界ですが、量子力学がこれをほぼ証明しています。般若心経の「色即是空、空即是色」はニュートンプレス社から発行された「無の物理学」という本に出てきます。無とか空(くう)の世界はお釈迦様の悟りの世界ですが、無とはnothingの世界ではなく、そこから



らいろんなものが無限に出てくる、無尽蔵の世界であるというのです。全てを生み出す無なのです。削いで削いで削いで無にした方が次の新たなもの

です。最後にくるものが能力であり、これは頭がいい、悪いなどの知能や才能です。考え方はプラス100点からマイナス百点までと幅広く、人生の結果は考え方、熱意、能力の三因子のうち、考え方が成功のカギを握っていることを示しているのです。考え方の例として、イスラム世界などで起きている宗教がらみの戦争があります。こちらが正しければ相手は間違っているという考え方が、平気で人を殺せる原動力になっているのです。

が生まれてくるということ。父は、禅の悟りの世界はいつでも科学が証明してくれると話していたことを思い出します。父は50年も前に湯川秀樹さんの本を片手にして、悟りの世界を、ゼロにして∞無限大という方程式をつくりました。そして最近の科学で分かったことは、物質を細分化していくと、ゼロになって、そこから新たなものがどっと出てくるというのです。まさに「無一物中無尽蔵」なのです。



それは何かと言うと、絶対神のような宗教の神様ではなく、神様とは大宇宙の大摂理を動かしているメカニズムとでも言いましょうか。村上先生は、見事なまでに美しい、完璧な遺伝子配列を見て、それを書いた、宗教の神を超越した存在something greatの存在を認めるしかない、と話しています。私はそれを大自然の摂理と言います。人間が地球とか宇宙をコントロールするというのは、笑止千万な不遜な考え方です。

私は人間の体は小宇宙だと言っています。自分の意思で生きていると思っている人は多いけれども、眠っている間も心臓はちゃんと働き、血液はきちんと体内を流れています。では心臓のポンプを動かしているのは何か。しかも細胞は自分自身を生かしながら、肺や心臓などの臓器のために一生懸命働き、臓器はあなたの体のために働いています。細胞も臓器もみんな助け合って生きています。そのメカニズムが狂うと病気になります。この極めて精緻なメカニズムは大宇宙の摂理の一端であって、稲盛さんは「大宇宙の意思」と言っていますが、同じことです。宇宙の摂理である宇宙時計に自分を合わせていけば、体は回転するようになるから、病気にはなりません。宇宙の摂理、意思に従って生きるということは、「俺が、俺が」という生き方とは反対に、利他、愛、慈悲で生きることです。中原先生は「愛」がキーワードですね。鳩山さんも「友愛」ですから本質的な部分では中原先生と同じです。

●この地球を大切に

私にとっては「本来無一物」「無一物中無尽蔵」「山川草木悉皆成仏」がキーワードです。地球は一つということであり、人間同士が敵対して争うことは大自然の摂理に反するのです。体に例えるなら、今の世界の状況は右の手と左の手が敵対関係にあって、左の手が右の手を切り落として、勝った、勝ったと叫んでいるけれども、実は気が付くと右の手も左の手も自分のからだの一部で、結局右手からの出血多量で死んでしまう。体は小指まで、全て必要だからあるのであって、体を構成する器官、臓器に優劣は一切ありません。それぞれがパーフェクトに役割を果たしているから生きており、それが大自然の摂理、意思、something greatのメカニズムと考えると、今、地球上で敵だ、味方だと戦争したり争ったりして武力で解決できるはずはありません。武力は使えば使うだけ拡大していきます。目には目を、歯には歯をでは何にもならない。それは本来の宇宙の意思とは反するからです。

人類は物欲を、強欲を満たすために、地球を食い荒らしています。その挙句、自分たちの利権、資源を守るため、マーケットを守るために戦争をしたりする。そういうことをやっている世界ですから、良くなるはずはなく、下手をすれば、人類は滅亡するのではないかと、私は思うのです。社会の変化はものすごいスピードで進んでいます。こういった世の中で私たちは何をすべきなのか。自分一人が頑張ったところで、と言って何もしない人がいますが、それは間違っています。一人ひとりとはちっぽけですが、まとまればすごいパワーになるのです。

私たちは毎年3月、大震災の犠牲者の冥福と、福島を再生を祈る「福島を忘れない!祈りの集い」を開いていますが、友人の物理学者の米沢富美子先生は「祈りとか強い心の思いは単なる気休めではなく、目に見えないけれども波動となって全世界に伝わっていきます」と話しています。



基調講演・法政大学法学部教授水野和夫先生

祈り、強い思い、願い、アクション。私たちは喧嘩することもなく、暴動を起こすこともなく、静かなる革命というか、静かなる心の革命を、無名の私たち

一人ひとりが、人間として正しいことを地道に重ねていく。これこそがこれからの地球の運命を決めるのだと思います。



世界各地で小競り合いが起きている今こそ、日本が本来持っていた多神教的な考え方、異質な価値観も飲み込む柔軟性に富んだ考え方がますます意味を持っていると思います。国境という壁があるのは政治の世界だけで、モノ、ヒト、カネ、情報は瞬時にボーダーレスで世界中を駆け回っています。国益、国益と叫べば叫ぶほど、地球益と衝突します。自国だけの利益だけを追求する国益という考え方は大自然、大宇宙の法則に反します。地球は有限の空間ですから、自国優先の政治はいずれ他国とぶつかり、成り立たなくなります。

これからの世界では、日本は経済力、軍事力で勝負するのではなく、「地球は一つ」という価値観を世界に発信していく必要があります。司馬さんがNHKテレビで述べたように、「無思想の思想」の日本人は、海から岸にたどり着いた異国の人の下半身を神として祀るなど、大自然と一体となってものごとを見る文化の包容力があります。自分は大自然の一部であって、大自然を征服しようとは思いません。科学技術で自然を支配しようというのは驕り高ぶった考えであり、それは大震災や原発事故でしっぺ返しを受けました。大震災は一部、大自然の浄化作用だと思うし、バランスを失った人間社会への大自然からの警告だと考えざるを得ません。地球はあらゆる生物の命をはぐくむ大地であり、生物と地球はへその緒でつながっていて、地球から命をもらっている生命共同体なのです。生物は地球から養分を吸収して生きています。ガイアの思想です。

地球は我々のたった一つの家で、国同士で争っている場合ではありません。まだしばらくは国益や聖戦の名を借りた争い、戦争などはなくならないでしょう。しかしこんな今だからこそ、大自然の一部である私たちは、右往左往しないで大地に足をどっしり置いて、自分のやるべきことにベストを尽くす。これこそが大宇宙の意思だと思います。瞬間瞬間をベストを尽くして完全燃焼する。こんなことを、あらためて申し上げて、私の話を終わります。

●フィルターを通る情報

持ち帰り寿司の老舗しのだ寿司の寿司弁当をつまんだ後、この日のハイライトである記念公開講座「世界はこれからどうなるのか?」が開かれました。

初めに、鳩山会館の主であり、民主党政権下で首相を務めた鳩山友紀夫さん(友愛への理解のために2012年、『由』を『友』に改名)が日本を取り巻く状況について、

問題を提起しました。鳩山さんは「我々がメディアから伝えられる世界は、メディアという『フィルター』を通じた世界だから、鵜呑みにすることの危険だ」と指摘しました。

こうした事情を背景にして鳩山さんは「日本国内は閉塞状況にあるから、権力を持っている人たちは、中国や韓国に対する敵愾心をあおり、国内の矛盾を誤魔化そうと

している。だから、その尻馬に乗っている勢力に騙されてはいけない」と、警鐘を鳴らしました。この他、世界情勢や日本の方向について具体的な例を挙げ、見通しを示しましたが、参院選では個人個人が自分の意思をはっきり1票に示すことが日本の針路を正すことになると、力説しました。鳩山さんは決して『宇宙人』ではなく、冷静に現実を分析できる大した人だと感心させられました。

鳩山さんの後、「資本主義の終焉と歴史の危機」の著者、水野和夫さん（法政大教授）が、著作と同じタイトルで基調講演しました。Ⅵ期からの継続塾生は「資本主義の終

●国境があるのは政治の世界だけ

基調講演の後「世界はこれからどうなるのか?」と題した特別パネルディスカッションに移りました。パネリストはテレビ朝日コメンテーターの川村晃司さん、生物学者の中村桂子さん、元外相の川口順子さん、司会進行を下村塾長、アドバイザーを水野先生が務めました。

下村塾長が、なぜこのテーマに決めたのかについて説明しました。「世界は混とんとし、様々な矛盾が紛争を引き起こしている。みんなはいつたい、世界はこれからどうなってしまうのだろうという不安を抱いている。人類はこれからどこへ向かうのでしょうか。」印象的だったのは、ジャーナリストの立場からの川村さんの発言で、彼はメディアから批判精神がなくなっているとことばに苛立ちを感じていることをにじませていました。「国境なき記者団に、報道の自由度は世界75位と指摘された日本です。NHKは国営放送に成り下がり、民放は自民党の恫喝に屈服し、新聞も自主規制し政府自民党にとって当たり障りのない記事を垂れ流しているのが現状です」とし、世界の言論界での日本の位置づけは、極端に低い、と話しました。富の偏在についても触れ、このまま進めば世界はアメリカのように極端な金持ちと極端に貧しい人しかいなくなると。

中村さんは、「今の生活空間はごく普通の人間にとって

●おいしい料理とお酒を堪能

この日の締めは、鳩山一家が居住していた空間を改装したホールでの交流パーティーでした。鳩山会館支配人のお蔭で、料理は上野精養軒にケータリングしてもらい、お酒は法人塾生パスポートの濱田総一郎社長が提供してくれました。普段では口にできない美味しい料理、ワイン、焼酎、清酒をいただきながら、夜遅くまでパーティーは行われ、最後は皆で肩を組み輪になって「ふるさと」を合唱して終わりました。

塾生の一言

会場になった鳩山御殿に驚いた。両面に露が生い茂る桜並木の坂道を、しばらく登って行くと、白亜の洋館が現れた。広い芝生の前庭とバラ園。こんな緑の空間が都心にあることが信じられなかった。異次元ともいべき会場での修了・入塾式だからこれまでにはなかった盛り上がりを見せたと思う。

焉と歴史の危機」が輪読の課題図書だったから、抵抗なく理解できたと思います。著作の中ではあまり触れられていなかった現在の形態の資本主義、バーチャル空間の金融資本主義が終わった後の社会の在り方について、水野先生は「新中世主義」を示しました。生活の空間をもっと狭くして背伸びをしない生き方、生活スタイルを、という主張だったと思います。



各分野の先生方とのパネルディスカッション

はとても広くて巨大で、さらにボーダーレス社会、電子情報社会の進展により、生活空間は秒刻み。水野先生が言ったような『新中世主義』は一つの解決策かもしれない」と発言しました。そして「皆の顔や暮らしぶりが分かるような身の丈に合った社会なら、もっとのんびりとした、孤独死などが無いような穏やかな社会になるのでしょうか」と、強調しました。川口さんは「進歩、進化、よりよく、という言葉が人類にとって生きる原動力になっていることは否定できない。小さく生きることも一つの見識だが、これだけを強調すると社会全体が委縮してしまう」と語りました。

最後に下村塾長は「カネ、モノ、情報は国境に関係なく瞬時に行き交う。こうした時代にある中、政治だけは国境に縛り付けられ、国益という名の利己主義がまかり通っている。そして自分たちだけは正しい、といった一神教的な考え方が紛争の背景にある。今こそ、東洋的な、日本的な、他者の存在を認める「無思想の思想」が必要ではないのか」と締め括りました。



交流パーティーで乾杯

6月勉強会は25日(土)

東京高田馬場・IZUNOME TOKYO。

CMCカーボンマイクロコイルの元島栖二先生が講義します。